OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	天治本『新撰字鏡』の原本判読における近世写本の可能性
Author(s)	中野, 直樹
Citation	語文. 2026, 124-125, p. 41-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103850
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

天治本『新撰字鏡』の原本判読における近世写本の可能性

中野直樹

一　はじめに

愛媛大学図書館鈴鹿文庫に近世末期書写の天治本『新撰字鏡』（以下、「愛媛大学本」）が蔵されている。この本は、天治本『新撰字鏡』原本を手に入れた一人である鈴鹿連胤の書写によるもので、原本が発見されてから間もない時期の写本ということもあり、数ある天治本『新撰字鏡』の近世写本の中でも特に重要なものと思われる。ところで、天治本『新撰字鏡』には大正時代以降に製作された複製本が数本あり、学界は研究上これに大変な恩恵を受けてきた。しかし、近年になって原本と複製本の本文には重大な異同があることを佐々木（二〇二四）が指摘しており、注意されるところである。

本稿では近世写本の成立事情を確認したうえで、宮内庁書陵部蔵天治本『新撰字鏡』（以下、「書陵部本」）と複製本を比較し、今後「書陵部本」の本文を利用する際には、（研究の内容にもよるが）国書データベースによる「書陵部本」の原本画像および複製本に加え、近世写本を活用すべきことを提案する。(1)

二　天治本『新撰字鏡』について

本稿では、天治本『新撰字鏡』の近世写本について取り扱うため、そもそも原本がいつごろ誰の手にあり、また近世写本がどのような人物によって書写されて広まっていったのかを確認しておくこととしたい。

二・一　原本発見の経緯と所蔵先の移動

天治本『新撰字鏡』原本の発見経緯は、『新撰字鏡』の近世写本にある跋文および、奥書によってある程度知ることができる。原本発見の経緯については、鈴鹿（一九一五）、大槻（一九一五・一九一六）、澤瀉（一九四四）、川瀬（一九五五）、阪倉（一九六七）等にまとめられているのだが、その情報の根拠が従来明示されて

こなかったので、確認しておきたい[2]。まず、天治本『新撰字鏡』の書写・流布に関する情報を持つ跋文（「愛媛大学本」・東京大学文学部国語研究室蔵黒川春村書写本（以下、「黒川本」[3]）・大東急記念文庫蔵木村正辞書写本（以下、「木村本」[4]）および、奥書（岡正武書写本（以下、「岡本」）・伴信友書写本（以下、「伴本」））を、含まれている情報が古い順に全文引用する（私に句点を加え、字体を通行のものに改めた。また、割注は［　］で囲んだ。行送り・空格は原文そのままとした）。

「愛媛大学本」跋文

右新撰字鏡中古久湮晦矣。其顕于近世者誰不珍重之而其書僅一巻而已。其序曰昌泰年中改張乃成十二巻也。由之観之其顕現者蓋抄出本而非原本也。予蚤歳得天治元年之古写本第二第四之両巻[5]。其不為全部也。遺憾甚矣。爾後捜之索之三十餘年。于茲至嘉永甲寅会有摂人某得之。而非古写本[6]。同有天治元年書写之跋言而欠予所得之両巻。若夫第十一之巻素斯之無也。当時蓋得天治本私所副写者也。其原本及十一之巻其散佚不可得而知也。故某就予乞補其両巻。予欣其同志何得不許之。予亦将以彼本補予欠也。交易而写之互以為全本矣。嗟呼天憫年来之深志而賜与者也欤。非人力也。大幸哉。大幸也。自今以往更得見原本及十一之巻則死且不朽矣。書以為跋。

安政二年乙卯十有二月

再書新撰字鏡後

中臣朝臣連胤

乙卯年。予以摂人所得古写本[7]与予所旧蔵相照。得互補其欠。深以為幸。但恨摂人所得者非天治本而猶欠第十一巻。以為宇内已絶。不可得復見。何意。丙辰年摂人又得其原本者与予所蔵者正相同。而併第十一巻皆有。於是此書初全得復天治之旧観。嗚呼亦奇矣。前日之所為幸。自今而視之則未足以為大幸。而今日之所為幸者。則足以為真大幸。因再書以志喜。

安政四年丁巳二月

［大意］

近世に至って、一巻の新撰字鏡が出現したが、序には十二巻で構成されているとあるのでこれは原本ではない。私は若い頃に天治本の巻二・四を得たが、全巻揃えられたわけではなかった。嘉永七年（一八五四）に至って、摂津の某人が新撰字鏡を得た。これは古写本ではないものの、天治元年の跋文を有し、私が所有する二巻分を欠いていた。また、巻十一も元から欠いていた。当時はもう原本を揃えられることは難しいと考えていた。摂津の某氏は私が所有する二巻分の複写を願い出てきたので、その申し出に喜んで応えた。私もまた、彼の本により欠けている巻を補った。互いに欠巻を写しあい、揃えられるだけ揃えることができた。大変な喜びである。さらに原本を見られればどんなに良いだろうか。

安政二年（一八五五）十二月

中臣朝臣連胤

一昨年に摂津の某人の本により、自分が所持する新撰字鏡の欠巻分を補った。ただ惜しいのが、原本ではないということと、巻十一がそもそも欠けていることであった。ほとんど諦めていたのだ

が、その翌年に摂津の某人はなんと原本を得ることに成功し、しかもそれには巻十一まで備わっていた。ここにおいて、新撰字鏡は全巻揃いとなった。なんという奇跡であろうか。再び誌す。
安政四年（一八五七）二月

「岡本」[8]奥書
（巻二）文政七年甲申三月京城護衛暇日謄写大番与力　岡　花押
天保十三年壬寅三月以一本校了　正武
同季八月以伴信友本再校了　正武
（巻四）新撰字鏡残欠第二第四巻文政八年九月
摸写功了　源伴信友[9]
天保十三年壬寅八月十六日以伴信友本影写
六十九老人蛍沢斎岡　正武

「伴本」[10]奥書
（巻四）新撰字鏡残欠第二第四巻文政八年九月
摸写功了　源伴信友[11]

「黒川本」跋文
右天治元年鈔本新撰字鏡十二巻者往年出於大和国斑鳩寺一切経蔵中矣。　皇国無二之奇書。而希世之典籍也。但其第二第四二巻者京師鈴鹿氏［筑前守中臣連胤］所蔵。故伴氏［源信友］伝摸之。[12]余亦嘗就伴氏本既得摸之。其他十巻者摂津国岸田忠兵衛［西成郡北伝法村農家云々］秘蔵。而未流布于人間。然頃年鈴鹿氏百計得伝摸之。余復懇請而借閲其摸本。[13]以昨今両年間。漸卒全写之功矣。実可謂生前之僥倖也。因不勝抃躍之至。記由来于巻尾。以諗後昆云爾。
安政五年秋七月下旬　藤原春村

［大意］
天治元年写本の新撰字鏡十二巻は、法隆寺の経蔵から出たもので、大変貴重な書である。巻二・四は京都の鈴鹿連胤氏が所持しており、これを伴信友氏が模写した。私は伴氏の写本で写した。その他の十巻分は摂津の岸田忠兵衛が所持しており、世間には流布していない。鈴鹿氏はなんとかこれを模写し、私も願い出て鈴鹿氏の写本で写した。[14]ここ二年でようやく本文を全て写し終えることができた。誠に喜ばしい。由来をここに記述する。以上。
安政五年（一八五八）七月下旬　藤原春村

「木村本」跋文
今世通行新撰字鏡。享和年中丘岬俊平氏所刊。其書僅一巻。而巻首有昌住自序云勘附改張。乃成十二巻也。然則非全帙。不待弁而可知也。頃日京師鈴鹿連胤氏獲天治元年鈔本。以摸写之。其書十二巻。与自序吻合。於是乎。始得窺其全豹矣。書法遒逸婉美。優有六朝之遺風。展閲之間。不覚駭歎。今也去天治七百有餘年。豈無神物擁獲至于此耶。黒河春村氏得借覧

之[15]。而求与予共謄写。予乃諾遂摸写第六第十一第十二之三巻。以贈諸春村氏後又費数月別手摸全部十二巻。此本是也。筆筆必慎欲[16]一点一画欲[17]毫無謬也。唯憾未見天治原帙耳。後来君子。有得其原本。請加訂正。

安政六年八月戊戌朔　　櫪齋木村正辞識

［大意］

現在通行している新撰字鏡は、享和年間に丘岬俊平氏が刊行した本である。その本は一巻であり、序の十二巻とは合わず、（原本の）全ての内容を伝えるものではないことは言うまでもない。近年鈴鹿連胤氏が天治元年の写本十二巻を模写した。これは序文と合致する巻数である。これにより、その全貌が明らかになった。本文の書風も美しいものである。黒川春村氏はこれを借り受け、私と共に写すことを求めてきた。私は、巻六・巻十一・巻十二の三巻分を写して、春村氏に送った。その後、別に数か月を費やして十二巻分の写本を作成した。この本[18]がまさにそれである。よく気を付けて写したので誤りは無いが、原本を見て写したわけではないので、後世の人が原本により訂正を加えてくれることを望む。

安政六年（一八五九）八月　　櫪齋木村正辞識

以上、『新撰字鏡』の近世写本の書写に関する顛末が分かる諸氏の跋文を順に記述した[19]。右の跋文・奥書、そして、近代の研究・手記[20]からは、次のように時系列で整理できる（享和本等は含まない）。

文政七年以前：鈴鹿連胤、京都の書肆より天治本原本巻二・四を手に入れる[21]。

文政七年：岡正武、鈴鹿氏成約済のため入手できず、巻二を書写する（京都の書肆にて）。

文政八年：伴信友、平田篤胤より写本を借りて巻二・四を書写する。

天保三年：黒川春村、「岡本」により巻二を書写する。

天保十三年：岡正武、作成した巻二の写本を「伴本」で校正し、巻四を同本で書写する。黒川春村、巻二を「伴本」で校正し、巻四を「岡本」で書写する。

嘉永七年：岸田忠兵衛、天治本の非古写本（巻十一欠）を手に入れる。

嘉永七年以後：岸田忠兵衛と鈴鹿連胤が互いの欠巻を写しあう。

安政二年：鈴鹿連胤、巻十一を除き「愛媛大学本」書写完了。

安政三年：岸田忠兵衛、天治本の古写本（原本（巻二・四以外すべて））を手に入れる。

安政四年：鈴鹿連胤、安政三年の事跡を「愛媛大学本」の跋文に追記する。おそらく、岸田氏から新入手（含巻十一）の古写本を借りて書写する[22]。

安政五年：黒川春村、巻二・四以外を鈴鹿連胤書写本（「愛媛大学本」か）で書写し、全巻の写本を完成させる。「黒川本」書写完了。

安政六年：木村正辞、黒川春村の筆写事業を手伝いながらも、

「愛媛大学本」か「黒川本」に拠り、全巻の写本を完成させる。「木村本」書写完了。

明治十二年[23]：博物館長町田久成の勧めにより、井上惣右衛門が、岸田忠兵衛蒐集の原本（巻二・四以外）を博物館に献上する。[24]

明治十三年：鈴鹿義鯨、鈴鹿家所蔵の原本（巻二・四）を内務省に献上。のち、博物館に納められる。[25]全巻揃う。

昭和五年：原本は宮内省図書寮所蔵となる。

このように見たとき、『新撰字鏡』をめぐって様々な人物がその本を求め、現在に至っていることが分かる。この他にも『新撰字鏡』を書写した（させた）人物は国学者をはじめ様々居るのだが[26]、大槻（一九一六）が述べるように、鈴鹿・黒川・木村三氏に関係する写本が多いというのが現存する写本群の現状である。また、筆者が見た範囲では、巻二・四に限られるものの岡・伴両氏の写本から出たものもまた往々にして目にするところであるから、このあたりが、現在様々なところに所蔵されている「書陵部本」の近世写本の出どころと判断してよいと考える。長々と右五氏を中心として『新撰字鏡』の来歴を確認してきたのは、このことを確認しておきたかったのである。[27]

先の跋文によれば十二巻揃っているものの、「黒川本」・「木村本」は原本によっていないということが分かる。このように近世写本といっても、写本の写本というように原本から距離のある本が含まれている（ここにいう原本とは天治元年写本のことで、これもまた祖本の写本ではあるが）。当然、写しを重ねれば重ねるほど誤写・改編は増えていくので、原態を知りたい立場からは、本文への信頼性は低下していく。

以上、近世写本が書写されていく経緯を踏まえた結論として、現存する近世写本の中で信頼できる本としてまず見るべき近世写本は、「愛媛大学本」と判断される。ただし、これは完本ではないので、足りない他の巻は「愛媛大学本」で書写したとされる「黒川本」が次に来る。「木村本」は「黒川本」の写しである可能性が否定できず、現状では「黒川本」よりも信頼度が落ちるうえに、大槻（一九一六）にて、すでに誤写の指摘がなされてもいる。[28]

二・二　複製本

「書陵部本」の複製本については、佐々木（二〇二四）に諸本がまとめられているので、以下それを引用する形で紹介したい。複製本は、以下の五種のものがある。[29]

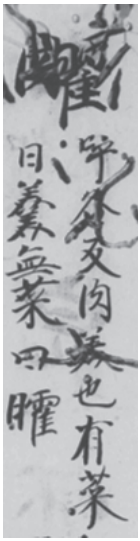
①『新撰字鏡　天治本』一九一六、六合館[30]
②『新撰字鏡　天治本』一九三三、西東書房[31]
③『新撰字鏡』一九四四、全国書房（古典索引叢刊3）[32]
④『天治本　新撰字鏡（増訂版）』一九六七、臨川書店[33]
⑤『新撰字鏡』一九九三、団結出版社（中国：北京）[34]

②以下の影印本は①を底本にした複製本であることを佐々木

（二〇二四）が指摘している。そのことは、⑤を除く各複製本の凡例その他にも明記されている。特に④の凡例には①の複製に際して一字を除いて何ら手を入れていないとある。

三　原本画像と複製本の異同

「書陵部本」の原本画像と現在出版されている複製本との比較は佐々木（二〇二四）が行っており、異同があることを指摘している（氏が挙げた注の種類は、補入符・転倒符・見消符・和訓・仮名音注・声点・返点・待点と多彩である）。影印刊行の際に本文を修正したことは、大槻（一九一六）が「木村本」および東京帝室博物館蔵雙鈎本に基づき行ったと複製本の跋に書いている[35]。それによれば、原本はすでに虫損が激しく判読に困難な箇所があるためであったとのことである。本章では、原本画像と複製本の異同について、筆者が気づいた範囲で佐々木氏とはできるだけ別の例を若干挙げて確認したい（佐々木氏の論考には豊富な図版での例示があるのでそちらも参照されたい。所在は複製本頁による。右乃至上、原本画像。左乃至下、複製本。以下同じ）[36]。



【図1】補筆の際の脱落（三十四頁一行目）

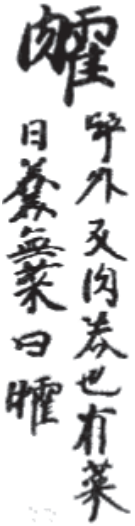
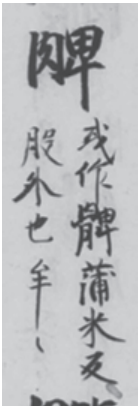


図1は原本での反切は「呼各反」だが、複製本で「呼外反」となっており、反切用字が異なっている。



【図2】踊り字の脱落（三十五頁三行目）

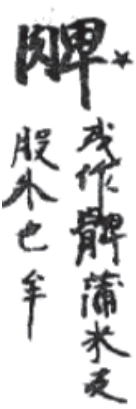


図2は原本の和訓は「牟々」だが、複製本で「牟」となっており、踊り字が落ちている。

【図3】補入注の判読（四十一頁一行目）

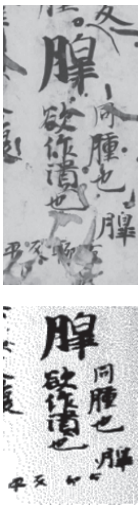


図3は、補入注として原本では「古聊反平」と読める。複製本では判読は難しい。また、「⿰月＋皐」の上にある補入記号が脱落している。

【図4】ノドに隠れた見出し字（一四一頁一行目）

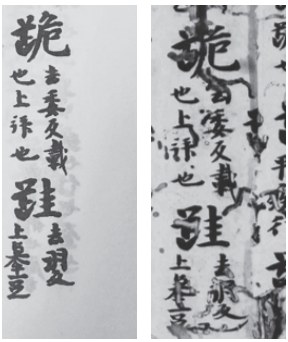
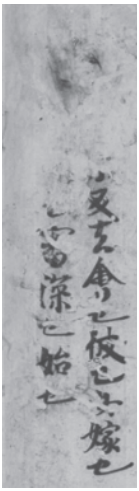


図4は、「⿰足＋危」右下のノドの部分に「⿰足＋圭」の下に入ると思われる足偏の見出し字が若干見えるが複製本では消えている。また、「⿰足＋圭」下の補入記号も消えている。

右のように、数回の原本調査によって、筆者も様々な異同を確認することができた。これ以外にもおそらく筆者が見逃した修正箇所はあるものと思われる。[37] それでは、複製本を参照する価値は無くなってしまったのかといえばそうではない。佐々木（二〇二四：二十五）では、複製本では見えない字が原本画像で確認できる例だけでなく、逆に原本画像では確認できない字が複製本で確認できる例が指摘されている（こちらの例も氏の論考に図版での例示がある。これらの例について佐々木氏は、複製の際の補筆とされている）。こちらの例も挙げてみたい。

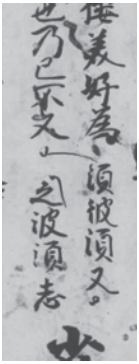
【図5】原本画像で確認できず、複製本で確認できる本文の例（二〇二頁八行目）





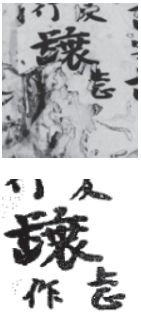
右の例は原本・原本画像で見出し字と注文の一部がうしなわれているが、複製本では明瞭に確認できる。また、原本には存在しないが、複製の際に加筆し、分かりやすくしようとしたような例もある。次の例は補入記号を書き足しているように見える。[38]

【図6】複製の際の独自の補筆例（六十頁二行目）



なお、原本における虫損の進行の場合を考えても良い例もある。例えば、次の例。

【図7】原本画像で虫損の例（一四〇頁八行目）



この例は、原本画像で「上正□」と読めるが一部虫損で読めないもので、原本でも注文が失われてしまい確認できない（享和本・群書類従本ともに該当箇所の立項無し）。しかし、複製本では「上正作」と明瞭に確認できる。これを補筆と見るか原本における複製本製作後の虫損の進行と見るか、悩ましいところである。

ともかく、複製本によってのみ確認できる例もあることから、複製本は今後も本文判読において活用されるべきであり、その価値は減じない。しかし、複製本には独自の修正箇所が特に虫損の激しい箇所を中心に存在することを考えてみれば、複製本によってのみ確認できる本文がどこまで原本の本文を伝えているのか、いささか不安な要素もあることは否めない。また、原本画像でのみ判読できる例、複製本でのみ判読できる例が存在する以上、どちらか一方だけを見ておけばよいわけでもない（互いにまったく見えなくなっている本文もある）。そこで活用したいのが近世写本である。近世写本は『新撰字鏡』だけでなく、どの古辞書もいまだ本文研究が進んでおらず、どれほどの信頼をおけるものか評価は定まっていないが、本の状態が良く本文を明瞭に判読できるものが多いので、参照する価値がある。原本画像と複製本で相違がある箇所や、双方が不明瞭な箇所について、近世写本で確認すれば、本文をどのように判読すべきか参考になる。その際には、数ある近世写本の中でも信頼のおける本を使いたい[39]。

四　おわりに

天治本『新撰字鏡』は語彙・音韻・表記等様々な分野の研究に用いられてきたが、大変ありがたいことに原本の画像が見られる今となっては、まずその画像を利用し、虫損などで見づらい箇所を複製本および近世写本で確認するという手順が望ましい（原本画像で見えなくなっているだけで、実際には本文が存在する場合もあるので、画像が明瞭だからといって、それだけを見て済ませるのはこれまた危険である）。既に紙幅が尽きたので、近世写本を

用いた具体的な検討は全て別稿に譲ることとしたい。

注

（1）大槻（二〇二〇・二〇二一）でも近世写本が本文判読の参考になると指摘されている。なお、古辞書の近世写本の役割は、本文の判読補助以外にも活用方法がある。たとえば、近世写本だけに伝えられた本文がある可能性もあるし、近世写本の旧蔵者や残存量を調べることで、当時の学術ネットワークの広がりなどをある程度知ることもできる。「書陵部本」はモノクロ、「愛媛大学本」はカラーで国書データベースにて全文閲覧可能。

（2）天治本『新撰字鏡』発見の経緯については、用語辞典や概説書で意外に説明がない（紙幅の都合もあると思われる）。なお、享和本の発見経緯については、川瀬（一九五五）、阪倉（一九六七）等に解説がある。

（3）国立公文書館内閣文庫に所蔵されている、黒川春村模写本とされているものは、「黒川本」を明治期に写したものだが（直接の写しか不明）、巻8以降を欠いているうえに、奥書も不完全にしか写せておらず、原態をよく伝えていない。静嘉堂文庫の三本も色川三中、田中頼庸、松井簡治らによる「黒川本」の近世・近代写本、校合本である。

（4）木村正辞の跋文が付された写本が大東急記念文庫にあることは、佐々木（二〇二四）で知り得た。

（5）鈴鹿連胤が第二・第四の二巻分を手にしたのは、文政七年（一八二四）以前と思われる。「岡本」・「伴本」の奥書によれば、彼らの写本は文政七年・同八年に書写されているからである。

（6）摂人が嘉永年間に手にしたのは天治元年の跋文を有する「非古写本」であるとする（摂人が古写本、つまり原本を手にするのは連胤の跋によれば、安政三年のこと）。これが事実であれば、嘉永の頃に天治本の巻二・四を除く、鈴鹿連胤氏が知らない天治本の写本が出回っていたことになる。これ以上に情報が無いが、このことについて従来言及がなかったので念のため言及しておく。

（7）摂人が得たのは「非古写本」のはずなので（安政二年跋文五行目）、齟齬があるように思われる。

（8）広島大学図書館本による。川越市立中央図書館が所蔵する『新撰字鏡』は国学者、山田衛居による「岡本」系統の明治写本である。

（9）朱筆。伴氏印の手写。

（10）京都大学附属図書館本による。

（11）朱印。

（12）梅谷（一九九三）が、平田篤胤の『古史本辞経』（巻四、四十六丁ウ）に、篤胤が信友に『新撰字鏡』を貸したことについて書かれていることを指摘している。ここからすれば、「黒川本」の跋にある「故伴氏伝摸之」というのは、間接的なものであったことが判明する。

（13）鈴鹿氏が岸田氏から借りて写したと春村が述べているので、鈴鹿氏の手元には一旦は全巻揃いの写本があったとみられる。鈴鹿（一九一五：一四三）も、複本一部が存在したと述べている。「愛媛大学本」はこの複本の一部が残ったものかと思われるがどうであろうか。ただし、岸田氏から借りたのは、古写本なのか非古写本なのか明確でない。

（14）鈴鹿（一九一五）は、『新撰字鏡』が江戸に広まったのは「翁が春村翁に提供したに初まる」と述べる。これは、全十二巻揃いの本が江戸に広まったのはというように読み替えたい。というのも、確かに春村の跋文だけを見れば、十二巻分を春村が連胤より借りて写したように見えるが、「黒川本」の各写本巻末にある奥書を見れば少し事情は入り組んでいる。巻二・四については、文政年間以後に江戸の岡氏や伴氏が書写・校正をしており、春村が十二巻の写本を

完成させる安政年間以前に既に江戸に写本が到達している（この二巻分は岡氏と伴氏の写本で春村は書写・校合している）。また、後述の木村氏の跋文によれば、「黒川本」の巻六・十一・十二は木村氏の手によって写されたものと考えられる（木村氏は連胤書写本によって写したので、実質は連胤書写本によったことにはなるが）。江戸に広まると言うのがどういったことを指すのか明確でないが、春村がはじめて十二巻を揃いの写本を江戸の国学者に紹介・貸し出したということになろうか。ちなみに、京都において『新撰字鏡』十二巻が揃いで見られるようになったのは、谷森善臣によるものらしい。赤堀（一九三〇：二一九）は、谷森が若い頃大阪にあるのを写して持ち帰ったとしている。ただし、これは裏付けが必要である。

（15）「黒川本」の跋文をふまえれば、ここに言う「借覧」は十二巻全部を借りたのではなく、巻二・四以外の十巻分か。

（16）「欲」字、朱筆で補入。

（17）「欲」字、朱筆でミセケチ。

（18）「木村本」を指す。ただし、木村氏は「愛媛大学本」に拠ったのか、「黒川本」に拠ったのか不明。

（19）「木村本」には、鈴鹿氏・黒川氏の跋文がある。なお、各跋文は本稿の筆者が原本と対照済みである。

（20）木村（一八九八）、鹿田（一九〇四）、梅谷（一九九三）および、本稿注25も参照。このほか、狩谷棭斎が文政十年頃に上方で『新撰字鏡』を書写していたことなどが、梅谷（同）で指摘されているが、今直接関わらないので年表に入れていない（梅谷氏は、棭斎が平田篤胤に写本を貸して、さらに信友がそれを書写したことを指摘している。本稿注12も併せて参照されたい）。梅谷氏は棭斎が写したのは連胤が所持していた天治本の巻二・四のみであろうという。なお、狩谷棭斎本で校合したという写本が静嘉堂文庫に所蔵されている。

（21）岡正武が文政七年に天治本巻二を書写している。ここからすれば、連胤が巻二を手にしたのは、それ以前となる（本稿注（5））。川瀬（一九五五）によれば、春村から連胤宛の書状に岡正武が京都の書肆で天治本を購入しようとしたが、連胤に先を越されたため、筆写して帰ったとのこと（書状は筆者未見）。また、梅谷（一九九三）が村田春門の日記『楽前日記』（文政七年四月二十七日条）に『新撰字鏡』が法隆寺から流出した旨の記述があることを指摘している。後藤（一九四一b）には、後藤奈牙遠（文化八年生、臼杵藩士）が法隆寺にある『新撰字鏡』を買い取ろうとしたが、断られたので現地に弟子と共に赴き、写本を作成したという逸話が記述されている。これがいつ頃のことであるか時期が書かれていないが、文政年間頃に『新撰字鏡』が法隆寺から流出するかもしれないという噂が当時にあったのかもしれない。後藤奈牙遠の伝については後藤（一九四一a）のほか、『辞書の運命―国学者後藤奈牙遠の業績』がある。

（22）連胤が岸田氏から古写本を借りて書写したと推定するのは、このあと、春村が連胤の本を借りて十二巻分の写本を作成するからである。岸田氏から古写本を借りていなければ、巻十一が揃わない（非古写本は巻十一欠）。春村が巻十一の写本も作れているのは、連胤写本の段階で巻十一が揃っていたからである。ここで気になるのは、「愛媛大学本」は、連胤が巻二・四以外を、岸田氏が最初に手に入れた非古写本の天治本『新撰字鏡』で写した本なのか、同氏が二度目に手に入れた古写本系の天治本『新撰字鏡』を写した本なのか、あるいは巻によって非古写本で写したものと古写本で写したものとが混ざっているのか分からない。これは別稿で検討したい。

（23）鹿田（一九〇四）では明治十二年となっているが、大槻（一九一五・一九一六）、澤瀉（一九四四）、阪倉（一九六七）では明治十三年となっており、一年のずれがある。仮に十二年としておく。

（24）町田氏は『新撰字鏡』に関心を寄せていたらしく、どの本を用いたのか分からないが、何度も写本を作り直させ、書家の小平狭山に作らせた『新撰字鏡』を採用し、その本を博物館に納めたとのこと（黒川（一九一三））。なお、岸田忠兵衛と井上惣右衛門の関係は不明。鈴鹿（一九一五：一四四）に翻字されている連胤から春村への書信の書案の中に、岸田忠兵衛を指すと思われる者として「岸田屋惣兵衛（実名不知）」の名が見える。岸田屋が屋号であるとすれば、苗字は別で井上であり明治以降にそちらを名乗り、名の方は何らかの事情で改名した可能性がある。ほかに、この岸田なる人物が井上姓であった可能性を高める資料として、梅谷（一九九三）が挙げる、『慊堂日暦』文政十二年九月朔日条の記述が参考になる。そこには、「井上主税。卜者居。醍醐家臣。其所知。近買法隆寺所蔵新撰字鏡廿八巻。云闕二巻。二巻京都某家蔵之。（以下略）」とあるものが参考になる（文中の廿八巻は誤記であろう。平凡社『東洋文庫』にて訓読文あり）。主税というのは官名であろうから、井上姓を持つ某と見ることができる。このように考えれば、岸田忠兵衛と井上惣右衛門はやはり同一人物であるかもしれない。井上氏の献上の件は鹿田（一九〇四）による（鈴鹿氏の献上の件については触れられていない）。

（25）鈴鹿氏の献上については、この時の賞状が愛媛大学図書館に所蔵されている（国書データベースで閲覧可）。また、『読売新聞』（明治十三年（一八八〇）十二月二十八日（火）全国版朝刊にも記事があり、そこでも内務省へ献上とされている（新聞記事については静岡県立中央図書館調査課より御教示）。木村（一八九八）では、鈴鹿・岸田両氏とも宮内省に献上したとする。献上したとされる先について、諸先行研究は記述が様々で、大槻（一九一五・一九一六）、澤瀉（一九四四）、川瀬（一九五五）、阪倉（一九六七）、神楽岡・小助川・田中・福田（二〇一九）は井上・鈴鹿両氏とも帝室博物館へ献上とする。東京国立博物館の「書陵部本」受け入れに関する書類および図書寮への移管に関する書類は非公開のため閲覧不可であるが、移管は昭和五年であるとの返答があった（二五年九月二五日、東京国立博物館総務課より返答）。宮内庁書陵部内用目録および、宮内庁宮内公文書館所蔵「貴重図書録　大正十三年～昭和五年」（識別番号ニ六八二）の「第二号　御物景祐天竺字源外七十一点帝室博物館ヨリ引継ノ件」にも昭和五年移管と記録がある（書陵部内用目録の情報は二五年九月九日、書陵部図書課より返答。公文書の情報は、二五年九月十日、宮内公文書館より返答）。

（26）書写者の中には戯作者もいた（石川（一九八二：二七））。

（27）鈴鹿（一九一五）、川瀬（一九五五）、梅谷（一九九三）によれば、『新撰字鏡』をめぐる国学者たちの書状が残っているようなので、それを見ればさらに詳しく整理がつくと思われる。今後の課題としたい。大和文華館には、天治本と享和本の中間形態のような本文を持つ本もある。こういった本も今後検討の必要がある（この本は大槻（二〇二〇）で知り得た。国書データベースで閲覧可能（書誌ID：100113469））。

（28）近世写本に写されていない箇所があること（写し落としなのか、意図的な無視なのか不明）は、佐々木（二〇二四）でも指摘されている。

（29）貞苅（一九八九）にも複製本の紹介がある。氏の論文執筆時においては原本閲覧が許されていなかったようである。なお、雄松堂書店から一九七六年に出版された本もあるが、これは大東急記念文庫本を複製したものなので（天治本とは本文が異なっている）、このリストには入らない。また、④のはしがきに上海版があるというが、筆者は未見。鈴木裕也氏は、上海図書館蔵本にある昌住序文の前に楊守敬の手になる一文があり、また、『日本訪書志』（巻二）に新撰字鏡の概要の記述、『留真譜』（巻三）にはその書影（一部）が掲載

されているので、楊守敬筆写本が大陸に渡っていることが確実なことから、彼の筆者本が出版されたものである可能性を指摘された（直話）。これについては別稿で検討する。

（30）国立国会図書館デジタルコレクションにて全文閲覧可能。

（31）国立国会図書館デジタルコレクションにて全文閲覧可能。奥付には改版とある。六合館から刊行されたものを再度複製したものに見えるが、手を入れている可能性は否定できない。

（32）『新撰字鏡国語索引』（一九五八、京都大學文學部國語學國文學研究室内國文學會（古典索引叢刊4））がセットになっている。

（33）『新撰字鏡国語索引：天治本享和本』（一九七五、臨川書店）がセットになっている。

（34）⑤の本文を確認すると、佐々木（二〇二四）が指摘するように影印がやや不鮮明であり、これにわざわざ拠る必要はない。この本の刊行当時は、中国の出版元から出されることにより、特に中国・台湾の研究者が天治本『新撰字鏡』の本文を閲覧しやすくなるという一定の役割がおそらくあったものと思われる。近年は海外でも『新撰字鏡』の研究が盛んになりつつあるが、現代においては日中・日台間での本の購入は容易なので、⑤の複製本としての役割はすでに終わったと見るべきであろう。なお、⑤の説明には「《新撰字鏡》十二巻、日本安政年間連胤輯。此鈔本出于大和国斑鳩寺一切経中、案其序曰、為昌泰年中改張乃成十二巻而成、十分珍貴。《字鏡》一書属小学著作、例仿《玉篇》等書、稍有増広。本書據法隆寺一切経影印。」とある。

（35）この雙鈎本は、佐々木（二〇二四）にて佐々木氏が東京国立博物館に問い合わせ、館から「小平狭山模写本」と思われる旨の回答を得ている。もしそうであるならば、雙鈎本は町田久成が書写させたものである（本稿注24を併せて参照）。

（36）複製本の頁の下端に漢数字で丁数が書かれているが、これは原本には存在しない。また、当初は原本と複製本との間の異同全例を挙げるつもりであったが、紙幅の都合上それは別稿で論じる。

（37）虫損か書入れかの判定が難しいところが多々あるので、原本のカラー複製本の刊行が望まれる。

（38）複製本で明瞭であるにも関わらず、原本画像で見えなくなっている例は、原本の修理によって見えなくなった可能性も考えてはどうかという鈴木裕也氏からの提案があった。

（39）原本画像・複製本・近世写本を参看した校本として、張磊・吴美富（二〇二四）『《新撰字鏡》校注』浙江大学出版社がある。筆者は未だ詳しく見ていないが、参考になるはずである。

参考文献

赤堀又次郎（一九三〇）『紙魚の跡』民友社

石川了（一九八二）「初代笠亭仙果年譜稿　その三」『大妻女子大学文学部紀要』（十四）大妻女子大学

梅谷文夫（一九九三）「狩谷棭斎の西遊　其二」『言語文化』（三十）一橋大学語学研究室

大槻文彦（一九一五）「珍書の複本の必要」『典籍』（一）古書保存会

――（一九一六）「跋」『新撰字鏡　天治本』六合館

大槻信（二〇二〇）「新撰字鏡の編纂課程」『国語国文』（八九・三）臨川書店

――（二〇二一）「『新撰字鏡』の序文を読む―信州大学日本語学夏季セミナー講演記録―」『信州大学人文科学論集』（八・二）信州大学人文学部

澤瀉久孝（一九四四）「解題」『新撰字鏡』全国書房

神楽岡幼子・小助川元太・田中尚子・福田安典（二〇一九）「展示目録　愛媛大学図書館鈴鹿文庫貴重書展」『近世文藝』（一一〇）日本近世文学会

川瀬一馬（一九五五）『古辞書の研究』大日本雄弁会講談社
木村正辞（一八九八）「天治本の新撰字鏡」『大八洲雑誌』（一三九）大八洲館
黒川眞道談（一九一三）「会員談叢（五）」『集古会誌壬子』（四）集古会
後藤寸美遠か（淵誠一）（一九四一a）「後藤奈牙遠畧傳」『臼杵史談』（三七）臼杵史談会
――――か（不知）（一九四一b）「後藤奈牙遠略傳に就て」『臼杵史談』（三八）臼杵史談会
阪倉篤義（一九六七）「新撰字鏡解題」『天治本　新撰字鏡（増訂版）』臨川書店
佐々木勇（二〇二四）「書陵部蔵『新撰字鏡』天治元年写本の原本と複製本」『論叢　国語教育学』（二〇）広島大学大学院国語文化教育学研究室
貞苅伊徳（一九八九）「日本の字典　その一」佐藤喜代治編『漢字研究の歩み』（漢字講座2）明治書院（貞苅（一九九八）『新撰字鏡の研究』に再録）
鹿田古井（一九〇四）「思ゐ出の記」（長澤規矩也編（一九八一）『本屋のはなし』（日本書誌学大系16）青裳堂書店）
鈴鹿三七（一九一四）『異本今昔物語抄：附・鈴鹿連胤略伝』鈴鹿三七
――――（一九一五）「新撰字鏡に就て」『典籍』（三）古書保存会
大東急記念文庫蔵『新撰字鏡』（木村正辞写。12.43.39.3502）
川越市立図書館蔵『新撰字鏡』（岡正武本の近世写本。貴116）
静嘉堂文庫蔵『新撰字鏡』（黒川春村跋本の近世写本。19233.1.108-35）
静嘉堂文庫蔵『新撰字鏡』（狩谷棭斎本による近世校合本。19234.1.108-35）
国立公文書館内閣文庫蔵『新撰字鏡』（黒川春村跋本の近代写本。208-0060）
静嘉堂文庫蔵『新撰字鏡』（黒川春村跋本の近代写本。20565.6.507-10）
静嘉堂文庫蔵『新撰字鏡』（黒川春村本による近代校合本。19232.12.108-35）

使用文献（原本）

宮内庁書陵部蔵『新撰字鏡』（天治本。559.28）
愛媛大学図書館蔵『新撰字鏡』（鈴鹿連胤写。813.Su3）
広島大学図書館蔵『新撰字鏡』（岡正武写。国文N2370）
京都大学附属図書館蔵『新撰字鏡』（伴信友写。4-85.シ.1貴）
東京大学文学部国語研究室蔵『新撰字鏡』（黒川春村写。26-142.1.632922-632933）

使用文献（影印）

『新撰字鏡　天治本』（一九一六）大槻文彦校、六合館
『新撰字鏡　天治本』（一九三三）山田孝雄再刊序、西東書房
『新撰字鏡』（一九四四）京都帝国大学文学部国語学国文学研究室編、全国書房
『新撰字鏡　天治本　増訂版』（一九六七）京都帝国大学文学部国語学国文学研究室編、臨川書店
『新撰字鏡』（一九九三）谷風等編『辞書集成』（一二・一三）、団結出版社（中国：北京）

〔書陵部蔵天治本『新撰字鏡』書誌事項〕

〔冊数〕十三冊（揃。内一冊は篇立）〔装訂〕粘葉装
〔表紙〕原表紙・改装表紙とも黄土色。模様無し
〔外題〕新撰字鏡　〔内題〕新撰字鏡
〔表紙寸法〕29・1～29・4糎×25・8～26・6糎
〔押界寸法〕25・4～25・6糎×22・3～22・5糎

〔丁数（除表紙・遊紙）〕篇立：5丁、巻一：36丁、巻二：30丁、巻三：28丁、巻四：26丁、巻五：27丁、巻六：33丁、巻七：37丁、巻八：25丁、巻九：25丁、巻十：34丁、巻十一：43丁、巻十二：33丁
〔行数〕八行　〔蔵書印〕宮内省図書印・法隆寺一切経
〔その他〕
・巻二改装表紙見返しに貼紙あり。「第二第四鈴鹿連胤旧蔵／以外摂津北傳法村岸田忠兵衛旧蔵」と来歴の説明がある。
・調査日は二十五年四月二十一日、同年六月二十三日、同年八月一日である。調査は初回のみ筆者と鈴木裕也氏が行い、他日は筆者が行った。

〔愛媛大学図書館蔵『新撰字鏡』（「愛媛大学本」）書誌事項〕
〔冊数〕五冊（篇立・巻一・二・四・十二（他巻欠））〔装訂〕袋綴装
〔表紙〕後表紙、黄土色。原表紙、砂色。ともに模様無し
〔後表紙外題〕無し　〔原表紙外題〕新撰字鏡　〔内題〕新撰字鏡
〔表紙寸法〕29・4～29・5糎×27・2～27・3糎
〔押界寸法〕押界無し
〔丁数（除表紙・遊紙）〕篇立：5丁、巻一：36丁、巻二：30丁、巻四：26丁、巻十二：34丁
〔行数〕八行　〔蔵書印〕尚褧舎蔵・愛媛大学鈴鹿文庫
〔その他〕
・小口書きなし。改装表紙右上に巻次の表示あり。
・鈴鹿義鯨氏が内務省へ『新撰字鏡』巻二・四を寄贈した際の賞状が帙に同封されている。
・調査は二十五年十月二十七日に筆者が行った。

〔東京大学国語研究室蔵『新撰字鏡』（「黒川本」）書誌事項〕
〔冊数〕十二冊（揃）　〔装訂〕袋綴装
〔表紙〕後表紙、橙色。模様無し。〔外題〕新撰字鏡　〔内題〕新撰字鏡
〔表紙寸法〕34・2～34・5糎×26・0～26・1糎
〔押界寸法〕押界無し
〔丁数（除表紙・遊紙）〕巻一：36丁、巻二：30丁、巻三：28丁、巻四：27丁、巻五：26丁、巻六：33丁、巻七：37丁、巻八：25丁、巻九：26丁、巻十：34丁、巻十一：43丁、巻十二：34丁
〔行数〕八行
〔蔵書印〕黒川真頼蔵書・黒川真頼・黒川真道蔵書・黒川家・黒川書齋・東京大学・東京帝国大学図書印・国語
〔奥書（字体は通行のものに直した）〕
（巻一）安政四年四月念二日以禿筆模写了　藤原春村
　明治三庚午二月三十日巻尾一紙　男　久朗再写
（巻二）文政七年甲申三月以天治真本模写拠蔵本比／校之　岡正武
　天保三年正月以岡氏本謄写之　黒河春村
　同十三午子十一月據伴信友所影／写之真本令一校了
（巻三）安政五年七月自恣日書写訖　春村
（巻四）新撰字鏡残欠第二第四巻文政八年九月／模写功了　源伴信友
　天保十三年壬寅八月十六日以伴信友本影写
　　六十九老人蛍沢齋　岡正武
　同年十月以岡氏本全模写了　黒河春村
（巻五）安政第四天歳次丁巳端午前一日謄写了　藤原春村
（巻六）安政第四暦蒭賓十七日令模写訖　藤原春村
（巻七）奥書なし。
（巻八）安政四年丁巳季冬念二十八日成功訖　春村
（巻九）安政五年如月五日書写了　藤原春村
（巻十）安政第五暦歳次戊午晩夏二十日謄写了　春村

（巻十一）奥書なし。
（巻十二）奥書なし。跋文あり。
〔その他〕
・小口書きなし。巻二、四のみ校注の書込みあり。
・巻一奥書の明治三庚午云々とある巻尾一紙はどこを指すものか明確でない。何らかの事情で巻一末尾が失われそれを補写したものか。ただし、巻一末尾の丁と他丁と紙質は同じように見える。筆跡も他丁と同じか。巻一の先頭に五十音図が挟まれており、これに「博物館蔵原本新撰字鏡一巻ノ裏ニアルモノ」とある。あるいはこちらかと一寸思ってしまうが、『新撰字鏡』が博物館に寄贈されたのは、明治十三年のため、時代的に合わないし、巻尾ではない。
・巻二の奥書にある同十三以下の一文は朱筆。巻四、信友の印は朱筆で筆写。
・調査は二十五年七月三十一日に筆者が行った。

【大東急記念文庫蔵『新撰字鏡』（「木村本」）書誌事項】
〔冊数〕十二冊（揃）〔装訂〕袋綴装
〔表紙〕原表紙、黄土色。模様無し。〔外題〕無し〔内題〕新撰字鏡
〔表紙寸法〕33・7糎×26・2糎〔押界寸法〕押界無し
〔丁数（除表紙・遊紙）〕巻一：37丁、巻二：31丁、巻三：29丁、巻四：27丁、巻五：28丁、巻六：34丁、巻七：38丁、巻八：26丁、巻九：26丁、巻十：35丁、巻十一：44丁、巻十二：35丁
〔行数〕八行〔蔵書印〕欟斎・木屯正辭
〔その他〕
・巻末に書写者（木村正辞）を含め、鈴鹿連胤・黒川春村の跋文あり。それぞれの跋文は筆跡が異なる。原本の筆致も模倣したものか。
・「詔」字に対して「正辞按詔字注干禄字書文也」と貼紙がある。このほかにも当初は貼紙があったと予測されるが、現存しているのは右の一か所のみ。
・帙右下に古梓堂文庫と大東急記念文庫の蔵書票が貼られている。本書が久原文庫から大東急記念文庫に至ったことが分かる。
・木村が見た本の本文にあったのであろう補入、虫損が写されており、ミセケチもなるべく写そうとしたようだが見逃している箇所もある。
・元の筆跡を復元しようとしたらしく筆跡が様々で、影写本と思われる。
・朱筆による誤字の訂正も見られる。
・調査は二十五年四月二十七日に筆者が行った。

付記
各典籍・資料の原本閲覧および調査に際して、愛媛大学図書館・川越市立図書館・京都大学附属図書館・国立公文書館内閣文庫・静岡県立中央図書館・静嘉堂文庫・宮内庁宮内公文書館・宮内庁書陵部・大東急記念文庫・東京国立博物館・東京大学文学部国語研究室・広島大学図書館当局より御厚誼を賜りました。また、信州大学鈴木裕也氏より書誌調査協力および御意見を頂戴しました。記して感謝申し上げます。本稿は、科研費「古辞書コーパスの構築」（25K00466）の助成を受けています。

（なかの・なおき　常葉大学短期大学部准教授）